

# 東北大学のAO入試はどう見られているのか？

—2000～2006年度学部新入学者アンケート調査を基に—

西 郡 大<sup>1)</sup>， 木村拓也<sup>1)</sup>， 倉元直樹<sup>2)</sup>＊

1) 東北大学大学院教育情報学教育部， 2) 東北大学高等教育開発推進センター

## 1. 問題の所在——実証研究による入試制度の策定

大学入学者選抜（以下、「大学入試」と略記）によって、毎年全国に約60万人規模で大量の大学生が誕生していく現状を踏まえれば、学力低下論争時に苅谷が再三述べた「実証研究に基づく政策論議を」<sup>1)</sup>という主張を持ち出すまでもなく、きちんとした実証データに基づいて根拠のある入学者選抜制度を策定する必要があることは言うまでもない。その一方で、1980年代に行われた臨教審以降の入試政策は、実証的根拠や技術的裏づけが全くないままに提示された「評価の多元化」という理念の御旗の下に舵が切られ、現在に到っているのが実情である。その結果、学力選抜を大学入試から全く排除したオープン・アドミッションが全国的に蔓延するという混乱状況をもたらしたというのが大学入試を巡る最近の状況であろう。実は、こうした現在の混乱状態は、データに起因した以下の3つの誤謬の帰結と見なすことができるのかもしれない。

まず、第1の誤謬とは「関係者に対する事実確認の誤謬」である。「評価の多元化」が大学生の入学後の学業成績の優秀さを保証するという従来から繰り返されてきた主張は、その実、統計の誤用によって結論付けられたものであった。つまり、「評価の多元化」を実現する有力な手段として知られる「面接や小論文重視」という結論は、1971年の中教審答申（通称：46答申）のデータによって、重相関係数の値が独立変数の数を増やせば増やすほどその性質上必然的に上がるといった統計上の常識を看過した上で導かれたもので

ある<sup>2)</sup>。このことは、当時の学力偏重の入試制度を変更したいという強い政治的意図の元で誘導されたと想定されるが、この結論そのものが、統計の誤用によって、当の学生の実態からかけ離れていたことに疑いようはない。

次に、第2の誤謬とは「時間的な誤謬」である。「評価の多元化」という政策指針は、46答申時の中教審や臨教審が当初目論んでいた、高学力層に対する過大な受験シフトの緩和のための施策となったというよりもむしろ、低学力層に対して特に顕著であるが、実質的に学力選抜抜きのオープン・アドミッションを広範にもたらす施策と化してしまったのである。このことは、大学進学率の打ち止めに少子化の影響が加味された結果、各大学における入試の選抜性が薄れるに従って起こったことであり、制度策定に対する予測意識の希薄さがもたらした結果と言わざるを得ない。

最後に、第3の誤謬とは、「構造的な誤謬」である。例えば、AO入試の登場当初のように、慶應義塾大学という「ブランド大学」で、しかも湘南藤沢キャンパス単独でしか実施しない入試において技術論的吟味が不十分な「面接や小論文重視」が採用され、例えそれが一時的に何らかの教育的意味を持ち得たとしても、全国で700近く存在する大学が同種の入試をこぞって行うのとでは、事情が全く異なってくる。子どもが受験のためだけに無理に勉強することは望ましくないからといって、そのことと受験制度から学力選抜を全面的に排除することとは同義ではない。大切なのは、「ミクロの視点とマクロの視点」<sup>3)</sup>を分ける考え方であり、

＊) 連絡先：980-8576 宮城県仙台市青葉区川内28 東北大学高等教育開発推進センター高等教育開発部入試開発室

こうした「部分で正しいことが全体として正しくないこと」を経済学では「合成の誤謬」<sup>4)</sup>という。もしこのことを取り違えれば、大学入試が制度的に全国的な学力崩壊を醸成してしまう構造たり得てしまう。

だが、こうした「誤謬」を単なる「あやまり」としておくことは生産的ではないであろう。この3つの「誤謬」は、逆に見れば、「評価の多元化」によって各大学の大学入試の自由度が増した今日、個別大学としての入試制度策定のために有益な視点を提供してくれるのである。つまり、入試の「当事者」である受験生やそれを支える高校教員や大学教員などの入試の「従事者」を両極とした入試との関係性の遠近さを現す第1軸（関係軸）、「未来」と「過去」を両極とした時点を現す第2軸（時間軸）、「ミクロ」と「マクロ」を両極とした構造を現す第3軸（構造軸）といった3つの軸が交差する三次元空間を考えれば、それはそのまま入試制度を策定するデータとは一体何であるかを示唆してくれる。つまり、入試に関係している誰の実情を反映し、彼らの過去／現在の実態なのか、或いは、未来の予測なのか、また、個別大学の事例なのか、全国的な傾向なのか、という組み合わせがそのまま制度策定に資するデータのフォーマット足り得るのではないだろうか。

実は、粗製濫造されてきた追跡調査の類を除けば、一般に大学入試研究の分野で制度策定に資するデータを作成しようという意図を持った研究は数少ない。その中で、東北大学は、全国の大学に先駆けて、入学者選抜研究においてデータを体系的に蓄積する努力がなされてきた稀有な大学の1つである<sup>5)</sup>。例えば、前号

に掲載された、倉元（2006）と倉元・西郡・佐藤・森田（2006）は共に、「従事者」である高校教員の「現在」の意見を、東北大学という「ミクロ」な場を舞台に設定して取られたデータであると総括できるのである。また、そうして得られたデータを総合して判断する基準として、大学入学者選抜制度の変遷から帰納的に導かれた「公平性の確保」「適切な能力の判定」「下級学校への悪影響の排除」という「日本型大学入学者選抜の三原則」<sup>6)</sup>が提示されており、東北大学の現行のAO入試もこの原理原則から乖離していないことが既に、前号の木村・倉元（2006）においてデータから検証済みである。即ち、東北大学のAO入試（実施状況は表1）が、「研究大学」を標榜している自身の教育理念・目的・課程に鑑み、高等学校で懸命に勉学に励み活動してきた受験生が不利益を被らない入学者選抜を行うという意味での「公平性」を確保し、これまで東北大学の「大学教育に必要な基礎学力」を育成してきた現場高校の教員のノウハウを存分に活用することで「下級学校への悪影響」を排除し、こうした条件の中で醸成される「大学教育に必要な基礎学力」と、それを「大前提」とした「プラスαの旺盛な勉学意欲」を「適切な能力」と捉え、「評価」することを行っているのである<sup>7)</sup>。

そこで、本研究は、入試制度策定に資するデータを更に供与すべく、「当事者」である学部新入生がAO入試を「現在」どう捉えているのかを、東北大学という「ミクロ」な場を舞台に設定した上で、検討することとする。勿論、何を根拠に入試制度を策定するのかという命題に、その大学の姿勢と見識が析出されてし

表1. 学部別AO入試実施年度（予定も含む）

| 学部      | 2000 | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 文学部     |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 教育学部    |      |      |      |      |      |      |      |      | ○    |
| 法学部     |      |      |      | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    |
| 経済学部    |      |      |      |      |      |      | ○    | ○    | ○    |
| 理学部     |      | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    |
| 医（医学科）  |      |      |      |      |      |      |      | ○    | ○    |
| 医（保健学科） |      |      |      |      |      |      |      |      | ○    |
| 歯学部     | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    |
| 薬学部     |      |      |      |      |      |      |      |      | ○    |
| 工学部     | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    | ○    |
| 農学部     |      |      |      |      |      |      |      | ○    | ○    |

まうことを踏まえれば、「当事者」である受験生と「従事者」である高校教員に、こうした「東北大モデルのAO入試」<sup>8)</sup>を今後も継続して肯定的に捉えて頂く意義は計り知れない。その手立てを探るため、本稿の結果が有益に利用されることが期待される。

## 2. 方法

### 2.1 調査票

東北大学アドミッションセンター（現高等教育開発推進センター）は、2000年度から東北大学の「AO入試」と「オープンキャンパス（以下、「OC」と略記）」の改善のための参考資料として、4月入学の学部新入生を対象とした悉皆によるアンケート調査を毎年実施している。本研究では、2000～2006年度の同調査の項目の一部を利用した。

調査票は全2ページで12の質問項目から構成されている。詳細は、巻末資料（2004年度実施調査票）を参照のこと。本研究で利用した質問項目は、性別、出身地域、AO入試受験の有無（Q1.）、東北大学のAO入試ポリシー<sup>9)</sup>の知識の有無（Q4.）、東北大学のAO入試に対する意見（Q4.）、OCへの参加経験の有無（Q6.）であり、無記名である。

調査対象者は2000～2006年度の4月に東北大学に入学手続きした学部新入生である。調査票は入学手続き書類とともに送付し、回収はオリエンテーション時に行った。調査対象者は7年間で17,117名であり、有効回答者数16,943名（回収率99.0%）であった。

### 2.2 分析手続き

Q4の自由記述形式で得られた回答を中心に分析した。分析の視点は意見の分類である。つまり、東北大学のAO入試に対して、肯定的な意見を含むものを「肯定」、反対に、否定的な意見を含むものを「否定」という2つのカテゴリーに分類した。具体的な分類基準は表2に示す通りである。1つの回答に「肯定」、「否定」の両方の意味を含む場合は、回答者がより強調している方に分類した。また、「肯定」にも「否定」にも分類が不可能なその他の意見については、分析対象外とした。なお、分類作業の信頼性については、(Q4.)の全回答から約1割に当たる1,000件の回答をランダ

表2. 分類基準

| カテゴリー | 分類基準             |
|-------|------------------|
| 肯定    | ・明らかに肯定しているもの    |
|       | ・印象良く捉えているもの     |
|       | ・AO入試実施学部での現状維持  |
|       | ・改善、提案等は含まない     |
| 否定    | ・明らかに否定しているもの    |
|       | ・疑問を呈しているもの      |
|       | ・AO入試未実施学部での現状維持 |
|       | ・改善提案等は含まない      |

ムに抽出し、2人の作業による分類の一致率（2人の一致数と全体数の割合）を算出した。

#### 【カイ2乗検定、オッズ（比）、残差分析による分析】

本研究では「肯定」もしくは「否定」のカテゴリーに分類された回答を学部新入生からみた東北大学のAO入試に対する評価とみなす（以下、「AO評価」と略記）。したがって、「AO評価」と「年度」、「学部」、「性別」、「出身地域」、「アドミッションポリシーに関する知識の有無（以下、『AP有無』と略記）」、「OCの参加経験の有無（以下、『OC有無』と略記）」、「AO入試受験経験の有無（以下、『AO受験有無』と略記）」、「AO入試の合格者・不合格者（以下、『AO可否者』と略記）」といった各変数との連関を以下の3点から検討した。

まず、全体の傾向を見るため、カイ2乗検定により各変数間の独立性を検定し、連関をみた。次に、連関が有る変数に対して、肯定と否定の件数の比（「肯定数」÷「否定数」：オッズ）からその傾向を確認した。オッズの比較には、2×2のクロス表ではオッズ比、それ以外のクロス表では残差分析を行い「調整された残差（adjusted residual）」<sup>10)</sup>を算出した。オッズ比が1であれば2変数は無関係、1より大きければ正の連関、1よりも小さければ負の連関を示す。「調整された残差」には標準正規分布が仮定されており、±1.96以上の値を示せば、5%水準で有意差があるとされる。上記の基準で有意とされたものについては、各クロス表の「調整された残差」の値をボードで示した。

#### 【対数線形モデル（log linear model）による分析】

上記の分析から、AO評価に特に影響を与えている要因を特定するために対数線形モデル（log linear model）を用いて最適なモデルを検討した。本研究のデータ構造では、AO実施学部と未実施学部が混在し、

さらに年度によってそれが変化するため、全変数を一括して扱うことは出来ない。したがって、全体的な傾向を分析したカイ2乗検定等の結果に基づき、適宜変数と対象データを選択して分析を行った。

### 3. 結果

#### 3.1 分類対象と分類結果

全回答16,943件のうち、2004年度より新設された医学部保健学科<sup>1)</sup>への回答431件とそれ以外の学部での無回答4,937件を合せた5,368件(31.7%)を除く11,575件(68.3%)が分類対象となった。さらに、「肯定」、「否定」への分類不可能な回答3,170件(18.7%)を除き、最終的に8,405件(49.6%)が分析対象となった。なお、分類の一致率は93.1%であった。

#### 3.2 分析データのプロフィール

分析データのプロフィールを示す。性別は、男子6,625件、女子1,769件、無回答11件であり、男子が女子の約3.8倍である。年度別にみてもその割合はほぼ一定している(2003年度のみやや低い)。出身地域別では、東北地方が3,748件(44.6%)と約半数を占め、続いて、関東1,999件(23.8%)、中部1,396件(16.6%)、近畿439件(5.2%)、北海道(2.9%)、中国(2.4%)、九州(2.1%)、四国(1.4%)、海外(0.1%)という順である。学部別にみると、各学部の入学定員数に依りて回答者数が異なる。文系(文・教・法・経)が2,483名、理系(理・医・歯・薬・工・農)が5,922名であり、理系の回答者は、文系の回答者の約2.4倍である。特

に工学部が多い。男女比は学部によって大きく異なる。特に、文学部と教育学部において女子の占める割合が相対的に高く、男女比は同程度である。反対に、工学部と医学部は男子比率が高い。各回答を年度別にみると、およそ1200件前後で安定している(表3)。

AP有無では、「有」が3,830件、「無」が4,565件、無回答が10件である。「無」の方がやや多い。

OC有無は、「有」が2,779件、「無」が5,404件、無回答が222件であった。有無の比率は、ほぼ1:2である。なお、OCの参加に関する質問(Q6.)は、2000年度とそれ以降の年度では選択肢が若干異なる。2000年度が(1:参加した 2:参加しなかった)の2択形式であるのに対して、2001年度以降では、3択形式であるのに対して、2001年度以降では、3択形式である(資料参照)。したがって、本研究では、2001年度以降の「1」と「2」の選択肢を「参加経験あり」、「3」を「参加経験無し」とみなし、2000年度の選択肢「1」と「2」への回答をそれぞれに振り分けた。

AO受験有無では、「有」が1,533件、「無」が3,467件、無回答が50件である。7年間にAO入試実施学部が増えているため(表1)、年度別の様相は異なっている。また、AO入試での合格者は1,200件、不合格は371件である。なお、「不合格」とされている者はAO入試で一度「不合格」となった後、一般入試など、別な選抜機会を経て最終的に合格した者である。

##### 3.3.1 全体的なAO入試への評価

AO評価の内訳は、「肯定」が6,273件、「否定」が2,132件であり、その比率は約3:1である。したがって、東北大学のAO入試は、学部新入生には総じて肯定的

表3. 学部、年度、性別で分けた回答者のプロフィール

| 学部   | 2000        | 2001        | 2002        | 2003        | 2004        | 2005        | 2006        | 合計          |
|------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 文学部  | 96 ( 1.2)   | 98 ( 1.2)   | 112 ( 0.9)  | 91 ( 0.8)   | 85 ( 1.1)   | 87 ( 0.9)   | 96 ( 0.8)   | 665 ( 1.0)  |
| 教育学部 | 42 ( 0.4)   | 33 ( 1.2)   | 35 ( 0.8)   | 34 ( 0.8)   | 35 ( 1.7)   | 34 ( 0.6)   | 30 ( 0.4)   | 243 ( 0.7)  |
| 法学部  | 107 ( 3.0)  | 87 ( 3.8)   | 82 ( 2.7)   | 87 ( 1.9)   | 90 ( 1.6)   | 84 ( 3.0)   | 88 ( 1.8)   | 625 ( 2.4)  |
| 経済学部 | 134 ( 4.2)  | 126 ( 3.4)  | 134 ( 2.7)  | 140 ( 2.3)  | 132 ( 3.9)  | 138 ( 3.9)  | 146 ( 2.9)  | 950 ( 3.2)  |
| 理学部  | 175 ( 4.3)  | 179 ( 5.4)  | 172 ( 5.6)  | 171 ( 5.1)  | 190 ( 4.6)  | 172 ( 7.2)  | 172 ( 6.2)  | 1231 ( 5.3) |
| 医学部  | 48 ( 5.9)   | 42 (13.0)   | 52 ( 7.7)   | 52 ( 5.5)   | 51 ( 4.7)   | 54 ( 5.8)   | 44 (21.0)   | 343 ( 7.0)  |
| 歯学部  | 26 ( 1.6)   | 32 ( 2.6)   | 29 ( 3.1)   | 29 ( 0.9)   | 34 ( 1.8)   | 26 ( 1.9)   | 25 ( 3.8)   | 201 ( 2.0)  |
| 薬学部  | 50 ( 1.8)   | 43 ( 2.1)   | 35 ( 2.2)   | 36 ( 1.8)   | 42 ( 3.2)   | 43 ( 5.1)   | 32 ( 2.6)   | 281 ( 2.4)  |
| 工学部  | 481 (10.7)  | 469 ( 9.7)  | 473 (10.8)  | 429 ( 9.7)  | 498 ( 9.6)  | 469 ( 8.2)  | 479 (10.4)  | 3298 ( 9.8) |
| 農学部  | 98 ( 3.5)   | 75 ( 1.9)   | 88 ( 1.8)   | 83 ( 1.4)   | 71 ( 1.6)   | 72 ( 1.7)   | 81 ( 2.5)   | 568 ( 2.0)  |
| 合計   | 1257 ( 3.9) | 1184 ( 4.1) | 1212 ( 3.7) | 1152 ( 3.1) | 1228 ( 3.8) | 1179 ( 4.0) | 1193 ( 3.8) | 8405 ( 3.8) |

( ) 内は、男子と女子のオッズ (男子数÷女子数)

表4. 年度

| 年度   | 肯定            | 否定            | オッズ  | 合計   |
|------|---------------|---------------|------|------|
| 2000 | 872<br>(-4.7) | 385<br>(4.7)  | 2.26 | 1257 |
| 2001 | 875<br>(-.6)  | 309<br>(.6)   | 2.83 | 1184 |
| 2002 | 891<br>(-1.0) | 321<br>(1.0)  | 2.78 | 1212 |
| 2003 | 874<br>(1.0)  | 278<br>(-1.0) | 3.14 | 1152 |
| 2004 | 925<br>(.6)   | 303<br>(-.6)  | 3.05 | 1228 |
| 2005 | 918<br>(2.7)  | 261<br>(2.7)  | 3.52 | 1179 |
| 2006 | 918<br>(2.0)  | 275<br>(-2.0) | 3.34 | 1193 |
| 合計   | 6273          | 2132          | 2.94 | 8405 |

( ) 内は、「調整された残差」

に評価されている。次に、こうした評価について「年度」、「学部」、「性別」、「出身地域」、「AP有無」、「OC有無」といった要因との関係で見た場合、どのような傾向があるのかを分析した。

## 【年度】

年度とAO評価との連関は有意であった ( $p<.005$ )。年度毎のオッズをみると、2003年以前は3.0未満、以降は3.0以上である。特に2000年度は低い。残差分析では、2000、2005、2006年度が有意である。2000年度では肯定の傾向が弱く、反対に、2005年度と2006年度では肯定の傾向が強くなっている。つまり、AO入試の導入当初よりも最近の方が、相対的に肯定の率が高い(表4)。学部別の分析では有意差はなかった。

## 【学部】

学部とAO評価との連関は有意であった ( $p<.05$ )。各学部のオッズは、医学部のみが2.0を下回る。残差分析でも医学部のみが有意であり、他学部と比べて肯定の程度が弱い。医学部でもAO入試に対して概ね肯定的だが、その度合いは弱い(表5)。年度別の分析では、2001、2006年度に学部間の有意差がみられた ( $p<.05$ )。

## 【性別】

無回答11件を除いた性別とAO評価との連関は有意であった ( $p<.005$ )。オッズ比は.7であり、男子よりも女子の方がAO入試に対して、肯定的評価をしてい

表5. 学部

| 学部   | 肯定            | 否定            | オッズ  | 合計   |
|------|---------------|---------------|------|------|
| 文学部  | 504<br>(.7)   | 161<br>(-.7)  | 3.13 | 665  |
| 教育学部 | 190<br>(1.3)  | 53<br>(-1.3)  | 3.58 | 243  |
| 法学部  | 453<br>(-1.3) | 172<br>(1.3)  | 2.63 | 625  |
| 経済学部 | 718<br>(.7)   | 232<br>(-.7)  | 3.09 | 950  |
| 理学部  | 937<br>(1.3)  | 294<br>(-1.3) | 3.19 | 1231 |
| 医学部  | 228<br>(-3.5) | 115<br>(3.5)  | 1.98 | 343  |
| 歯学部  | 148<br>(-.3)  | 53<br>(.3)    | 2.79 | 201  |
| 薬学部  | 205<br>(-.7)  | 76<br>(.7)    | 2.70 | 281  |
| 工学部  | 2466<br>(.2)  | 832<br>(-.2)  | 2.96 | 3298 |
| 農学部  | 424<br>(.0)   | 144<br>(.0)   | 2.94 | 568  |
| 合計   | 6273          | 2132          | 2.94 | 8405 |

( ) 内は、「調整された残差」

表6. 性別

| 性別 | 肯定   | 否定   | オッズ  | 合計   |
|----|------|------|------|------|
| 男子 | 4855 | 1770 | 2.74 | 6625 |
| 女子 | 1411 | 358  | 3.94 | 1769 |
| 合計 | 6266 | 2128 | 2.94 | 8394 |

表7. 出身地域

| 出身地域 | 肯定   | 否定   | オッズ  | 合計   |
|------|------|------|------|------|
| 北海道  | 177  | 71   | 2.49 | 248  |
| 東北   | 2793 | 955  | 2.92 | 3748 |
| 関東   | 1471 | 528  | 2.79 | 1999 |
| 中部   | 1060 | 336  | 3.15 | 1396 |
| 近畿   | 317  | 122  | 2.60 | 439  |
| 中国   | 166  | 41   | 4.05 | 207  |
| 四国   | 93   | 31   | 3.00 | 124  |
| 九州   | 149  | 33   | 4.52 | 182  |
| 合計   | 6226 | 2117 | 2.94 | 8343 |

る(表6)。年度別、学部別の分析では、2000、2002、2005年度、教育学部、法学部、医学部、工学部で性差が有意であった。ただし、ほぼ全年度(2006年度のみ除く)、全学部におけるオッズ比は1.0未満であり、女子が肯定的という傾向は変わらない。

## 【出身地域】

無回答と海外出身の62件を除いた出身地域には、AO評価との連関は見られなかった。(表7)。

## 【AP有無】

無回答10件を除いたAP有無とAO評価との連関は

有意であった ( $p<.005$ )。オッズ比は1.27とAP知識を持つの方が、肯定的な評価をしていた (表8)。年度別の分析では有意差がみられなかったが、学部別では、工学部のみが有意であった ( $p<.005$ )。

#### 【OC有無】

無回答222件を除いたOC有無とAO評価との関連は有意であった ( $p<.005$ )。オッズ比は1.26とOC参加経験のある方が、AO入試を肯定的に捉えていた (表9)。学部別の分析で有意差は見られなかった。

#### 3.3.2 AO入試実施学部における評価

対象をAO入試実施学部限定し (ただし、実施学部によって実施年度は異なる)、AO受験有無とAO評価との関連をみたところ、有意差が確認された ( $p<.005$ )。オッズ比は1.90であり、AO入試の未経験者と比べて、約2倍近くの経験者が肯定的に評価していた (表10)。年度別、学部別の分析では、2001、2003、2005年度の隔年で有意であり ( $p<.005$ )、学部では、経済学部を除き、歯学部、工学部、理学部、法学部の4学部において有意差が確認された ( $p<.05$ )。

実施学部別、年度別の分析では、経済学部と2006年度の理学部を除く全てのオッズ比が1.0以上であり、概してAO入試経験者がAO評価をより肯定的に捉えていた (表11)。

表8. AP有無

| APの知識有無 | 肯定   | 否定   | オッズ  | 合計   |
|---------|------|------|------|------|
| 有       | 2950 | 880  | 3.35 | 3830 |
| 無       | 3313 | 1252 | 2.65 | 4565 |
| 合計      | 6263 | 2132 | 2.94 | 8395 |

表9. OC有無

| OC参加経験 | 肯定   | 否定   | オッズ  | 合計   |
|--------|------|------|------|------|
| 有      | 2162 | 617  | 3.50 | 2779 |
| 無      | 3975 | 1429 | 2.78 | 5404 |
| 合計     | 6137 | 2046 | 3.00 | 8183 |

表10. AO受験有無

| AO入試経験 | 肯定   | 否定   | オッズ  | 合計   |
|--------|------|------|------|------|
| 有      | 1270 | 263  | 4.83 | 1533 |
| 無      | 2489 | 978  | 2.55 | 3467 |
| 合計     | 3759 | 1241 | 3.01 | 5000 |

#### 3.3.3 AO入試の合格者・不合格者別の評価

対象をさらにAO入試受験者に限定し、AO合否者とAO評価との関係をみたところ、その関連は有意であった ( $p<.005$ )。オッズ比は5.73と非常に高く、合格者が不合格者よりも約6倍弱、AO入試を肯定的に捉えていたことが分かる (表12)。また、性別、年度、学部、AP有無、OC有無を分けた場合でも、全てにおいて有意差が見られた。性別、年度、学部、AP有無、OC有無を問わず、合否の違いがAO評価に与える影響は直接的で大きかったと言える。

#### 3.4 対数線形モデルによる分析

以上の分析結果から、AO受験有無やAO合否者は、AO評価に対して、相対的に大きな影響を与えているとみることができる。この2つの共通点として、AO入試の当事者性が考えられる。特に、合格者、不合格者の違いがAO評価に与える影響は、直接的で強い関係であった。そこで、次いで影響の大きかったAO受

表11. 各学部における年度別のオッズ比と検定

| 学部 | 年度   | オッズ比  | 学部 | 年度        | オッズ比  |
|----|------|-------|----|-----------|-------|
| 工  | 2000 | 1.19  | 歯  | 2000      | —     |
|    | 2001 | 3.11* |    | 2001      | —     |
|    | 2002 | 1.60  |    | 2002      | —     |
|    | 2003 | 2.78* |    | 2003      | —     |
|    | 2004 | 1.19  |    | 2004      | 5.50  |
|    | 2005 | 2.88* |    | 2005      | —     |
|    | 2006 | 1.85* |    | 2006      | 3.50  |
|    | 全体   | 1.89* |    | 全体        | 7.65* |
| 理  | 2001 | 1.79  | 法  | 2003      | 5.96  |
|    | 2002 | 1.92  |    | 2004      | 4.47  |
|    | 2003 | 1.32  |    | 2005      | — *   |
|    | 2004 | 2.33  |    | 2006      | 2.75  |
|    | 2005 | 2.64  |    | 全体        | 5.02* |
|    | 2006 | 0.79  | 経  | 2006 (全体) | 0.96  |
|    | 全体   | 1.61* |    |           |       |

\* : カイ2乗検定で有意差が確認されたもの ( $p<.05$ )

— : 「否定」の度数が0でオッズ比の計算ができなかったもの

表12. AO入試における合格者・不合格者

| AO入試合否 | 肯定   | 否定  | オッズ  | 合計   |
|--------|------|-----|------|------|
| 合格     | 1073 | 127 | 8.45 | 1200 |
| 不合格    | 221  | 150 | 1.47 | 371  |
| 合計     | 1294 | 277 | 4.67 | 1571 |

験有無の影響を除去するため、対数線形モデルを用いて、それ以外の要因とAO評価との関係を分析した。対象とした変数は、「性別」、「OC有無」、「AP有無」、「年度」、「AO入試実施学部」である（以降、「対象変数」と呼ぶ）。仮に、モデル上、これらの諸要因とAO評価の連関性が消えてしまえば、ここまでの分析で見られた連関は、AO受験有無の影響による見かけ上のものであったと考えられる。AO受験有無の影響を取り除いても関連が残るならば、当該要因はAO評価に実質的な影響を与えていることになる。

### 【対数線形モデル】

本稿における対数線形モデルの表記規則を示す。「i」は、対象変数を示すカテゴリーの添え字である。各対象変数は「性別；i=1：男子，i=2：女子」，「OC有無；i=1：有，i=2：無」，「AP有無；i=1：有，i=2：無」，「年度；i=1：2000年度，i=2：2001年度，i=3：2002年度，i=4：2003年度，i=5：2004年度，i=6：2005年度，i=7：2006年度」，「AO入試実施学部；i=1：法学部，i=2：理学部，i=3：歯学部，i=4：工学部」とする。「j」は、AO受験有無を示すカテゴリーの添え字であり、「j=1：有，j=2：無」である。「k」は、AO評価を示すカテゴリーの添え字であり、「k=1：肯定，k=2：否定」である。したがって、性別，OC有無，AP有無は $2 \times 2 \times 2$ ，年度は $2 \times 2 \times 7$ ，AO入試実施学部は $2 \times 2 \times 4$ のクロス表となる。本研究で用いるクロス表の例を表13に示す。

3重クロス表の連関を対数線形モデルで表すために、A，B，Cの周辺度数の効果を $\lambda_{A(i)}$ ， $\lambda_{B(j)}$ ， $\lambda_{C(k)}$ としたときに、3変数独立モデルは（1）式である。

$$\log \mu_{ijk} = \lambda + \lambda_{A(i)} + \lambda_{B(j)} + \lambda_{C(k)} \quad (1)$$

ただし、 $\log \mu_{ijk}$ ：セルijkの予測対数度数

$\lambda$ ：全セル度数の幾何平均の対数

$\lambda_{A(i)}$ ：対象変数のカテゴリーの周辺度数の影響

$\lambda_{B(j)}$ ：AO受験有無のカテゴリーの周辺度数の影響

$\lambda_{C(k)}$ ：AO評価のカテゴリーの周辺度数の影響

飽和モデルは、（2）式で表される。

$$\log \mu_{ijk} = \lambda + \lambda_{A(i)} + \lambda_{B(j)} + \lambda_{C(k)} + \lambda_{AB(ij)} + \lambda_{AC(ik)} + \lambda_{BC(jk)} + \lambda_{ABC(ijk)} \quad (2)$$

（2）式は（1）式に以下の変数が加わったものである。

$\lambda_{AB(ij)}$ ：対象変数とAO受験有無の1次交互作用

表13. クロス表（ $2 \times 2 \times i$ ）の例

| 対象変数(i) | 受験経験(j) | AO評価(k)  |
|---------|---------|----------|
| 対象変数1   | 有       | 肯定<br>否定 |
|         | 無       | 肯定<br>否定 |
| ...     | 有       | 肯定<br>否定 |
|         | 無       | 肯定<br>否定 |
| 対象変数i   | 有       | 肯定<br>否定 |
|         | 無       | 肯定<br>否定 |

$\lambda_{AC(ik)}$ ：対象変数とAO評価の1次交互作用

$\lambda_{BC(jk)}$ ：AO受験有無とAO評価の1次交互作用

$\lambda_{ABC(ijk)}$ ：対象変数，AO受験有無，AO評価の2次交互作用

（1）式，（2）式の中で2変数間の関係は「1次交互作用」，3変数間の関係は「2次交互作用」と呼ばれる<sup>12)</sup>。独立モデルと飽和モデルとの間に、7つの中間的なモデルが考えられるが、本研究では「対象変数がAO評価に影響を与えるか否か」が関心であるために「対象変数とAO受験有無」，「AO受験有無とAO評価」の1次交互作用は分析の対象外である。これらのパラメータは全てあらかじめモデルに含まれている必要がある。本稿の表記規則にしたがうと前者は $\lambda_{AB(ij)}$ ，後者は $\lambda_{BC(jk)}$ である。以上のことから、検討の対象は以下の3つのモデルに限定される。

$$\text{モデル1：} \log \mu_{ijk} = \lambda + \lambda_{A(i)} + \lambda_{B(j)} + \lambda_{C(k)} + \lambda_{AB(ij)} + \lambda_{AC(ik)} + \lambda_{BC(jk)} + \lambda_{ABC(ijk)} \quad (3)$$

$$\text{モデル2：} \log \mu_{ijk} = \lambda + \lambda_{A(i)} + \lambda_{B(j)} + \lambda_{C(k)} + \lambda_{AB(ij)} + \lambda_{AC(ik)} + \lambda_{BC(jk)} \quad (4)$$

$$\text{モデル3：} \log \mu_{ijk} = \lambda + \lambda_{A(i)} + \lambda_{B(j)} + \lambda_{C(k)} + \lambda_{AB(ij)} + \lambda_{BC(jk)} \quad (5)$$

「モデル1」の（3）式は飽和モデルである。「モデル2」は飽和モデルから2次的交互作用を除いたもの（ $\lambda_{ABC(ijk)} = 0$ としたもの）であり、対象変数とAO評価，AO受験有無とAO評価の双方に関係があるとするモデルである（つまり、 $\lambda_{AB(ij)}$ 及び $\lambda_{BC(jk)}$ は0とみなせない）。以下同様に、「モデル3」は、対象変数とAO評価の関係を取り除いたもの（つまり、 $\lambda_{AC(ik)} =$

0としたもの)であり、対象変数とAO受験有無、AO受験有無とAO評価のみが関係あり、とするものである。

最適モデルの決定は、江上ら<sup>13)</sup>にならい、アプトンの方法<sup>14)</sup>を用いる。本研究におけるモデルの適合度は、カイ2乗検定の統計量が5%水準で有意差が確認されるかどうかを基準とする。あるモデルが最適なものであると判断されるためには、

- ① 当該モデルより自由度の小さい全てのモデルと比較して、有意に適合度が低くないこと。

上記3つのモデルは、パラメータ数が異なる場合には、モデルに含まれるパラメータが包含関係にあり、すべて階層モデルとなっている。したがって、パラメータ数の差を自由度として、カイ2乗検定に有意差が確認されるか否かで判断することができる。

- ② 同じ自由度のモデルと比較したとき、最もカイ2乗統計量の値が小さく、最もよく適合しているモデルであること。

- ③ 当該モデルより自由度の大きい全てのモデルと比較して、有意に適合度が低いこと。

以上3つの条件を全て満たす唯一のモデルを最適モデルと判断する。

パラメータの推定は、自由度の数だけサンプルから推定するパラメータ(「自由パラメータ」<sup>15)</sup>と呼ぶ)と自由パラメータが推定されることで、自動的に値が決定されるパラメータが存在する。本研究では、性別が「男子」、OC有無が「有」、AP有無が「有」、年度は「2006」年度を除く全年度、学部は「工学部」を除く全学部を単独で設定する自由パラメータとする。また、これらの組み合わせにより自由パラメータが全て推定されることで自動的に値が決まるパラメータには「0」が固定される。つまり、 $\lambda$ の値は、0に固定されたパラメータを基準(以下、「基準指標」と略記)とした値といえる。したがって、 $\lambda$ の値の符号が、正であれば、基準指標と比較して正の関係であることを示し、負であれば負の関係を示す。例えば、対象変数が「性別」であり、「モデル2」が最適モデルであると判断された場合、「性別が『男子』で、AO評価が『肯定』」というセルの $\lambda$ の値が正、つまり、 $\lambda_{AC(11)} > 0$ であれば、「性別が『男子』で、AO評価が『否定』」

が「女子」で、AO評価が『肯定』」、「性別が『女子』で、AO評価が『否定』」というその他の組み合わせのセルの $\lambda$ の値は、 $\lambda_{AC(12)} = 0$ 、 $\lambda_{AC(21)} = 0$ 、 $\lambda_{AC(22)} = 0$ と自動的に決定され、これらの基準指標と比較して正の関係があるとみることができる。したがって、「男子は女子よりもAO入試に対して肯定的」という傾向を表すものとして解釈できる。

## 【分析結果】

性別、OC有無、AP有無のカイ2乗の統計量と最適モデルを示したものが表14である。年度とAO入試実施学部は自由度が異なるため別に示す。イタリックの数値に下線を引いた部分が各対象変数の最適モデルである。なお、 $\lambda$ の( )の値は、「標準化された値(standardized vale)」を示し、漸近的に標準正規分布をなすものである<sup>16)</sup>。したがって、5%水準である $\pm 1.96$ を基準に有意性の検定も考えられるが、本研究では検定は考慮せず、関係の強さの程度を示す指標とみなすことにした。

### 【性別】

「モデル2」が最適モデルとして選択された。つまり、「性別とAO受験有無とAO評価」の2次交互作用による影響は見られないが、「性別とAO評価」の1次交互作用は $\lambda_{AC(11)} = -0.278 (-2.66)$ であった。負の値をとることから、「女子」の方が「男子」よりもAO入試を肯定的に捉える傾向が強いと解釈できる。

### 【OC有無】

「モデル3」が最適モデルとして選択された。つまり、「OC有無とAO受験有無とAO評価」の2次交互作用も「OC有無とAO評価」の1次交互作用も見られなかった。したがって、OC有無がAO受験有無との関わりにおいてAO評価に与える影響も、また、OC有無がAO評価に直接的に与える影響も無いことが示された。

### 【AP有無】

飽和モデルである「モデル1」が最適モデルとして選択され、「AP有無とAO受験有無とAO評価」の2次

表14. カイ2乗値と最適モデル(年度・学部以外)

| モデル  | 自由度 | 性別          | OC有無         | AP有無  |
|------|-----|-------------|--------------|-------|
| モデル1 | 0   | 0.00        | 0.000        | 0.00  |
| モデル2 | 1   | <u>3.05</u> | 0.375        | 10.58 |
| モデル3 | 2   | 10.43       | <u>0.701</u> | 11.78 |



交互作用が確認された。  $\lambda_{ABC(111)} = .808 (3.43)$  である。正の値であることから、APの知識を有しAO受験経験が有る者は、AO評価をとりわけ肯定的に捉える傾向があると解釈ができる。1次交互作用を見てみると、  $\lambda_{AB(11)} = 2.46 (12.39)$  であり、AP知識の「有」と受験経験の「有」との関係は強い。一方、  $\lambda_{AC(11)} = .005 (.06)$  とほぼ0であり、AP知識の「有」とAO評価の「肯定」には直接的な関係が無いことが示された。

〔年度〕

飽和モデルである「モデル1」が最適モデルとして選択され（表15）、「年度とAO受験有無とAO評価」の2次交互作用が確認された。各推定値は、  $\lambda_{ABC(111)} = -.15 (-.55)$ ,  $\lambda_{ABC(211)} = .62 (2.14)$ ,  $\lambda_{ABC(311)} = .06 (.23)$ ,  $\lambda_{ABC(411)} = .52 (1.80)$ ,  $\lambda_{ABC(511)} = .06 (.24)$ ,  $\lambda_{ABC(611)} = .67 (2.44)$  であり、2001, 2003, 2005年度において、2006年度を基準に、AO受験有無の「有」とAO評価の「肯定」との間に強い正の関係がみられた。ただし、実施学部別に年度を分析した結果と照らし合わせると、回答者数数の多い工学部に影響されたことが分かった。

〔AO入試実施学部（経済学部を除く）〕

年度の分析により、年度の違いがAO受験有無との関係においてAO評価に影響を与えていることが分かった。したがって、年度がAO評価に与える影響があることを前提にAO入試実施学部の中でAO受験有無の影響を見る必要がある。年度による影響を相殺するため、2006年度のみAO入試実施の経済学部を対象から外し、2003年度以降の法学部、理学部、歯学部、工学部のデータを対象に対数線形モデルによる分析を行った。

その結果、「モデル1」が最適モデルとして選択され（表16）、「AO入試実施学部とAO受験有無とAO評価」の2次交互作用が確認された。各推定値は、  $\lambda_{ABC(111)} = .91 (2.07)$ ,  $\lambda_{ABC(211)} = -.17 (-.77)$ ,  $\lambda_{ABC(311)} = 1.26 (2.15)$  であり、工学部を基準に、法学部、歯学部は正の関係がみられたが、理学部は負の関係がみられた。すなわち、法学部と歯学部ではAO入試経験者がより肯定的に捉える傾向が強く、理学部ではAO入試経験者と未経験者でさほどの違いが見られなかった、ということの意味する。なお、この傾向は学部別

表15. カイ2乗値と最適モデル（年度）

| モデル  | 自由度 | 年度    |
|------|-----|-------|
| モデル1 | 0   | —     |
| モデル2 | 6   | 15.52 |
| モデル3 | 12  | 21.27 |

表16. カイ2乗値と最適モデル（AO入試実施学部）

| モデル  | 自由度 | 学部    |
|------|-----|-------|
| モデル1 | 0   | —     |
| モデル2 | 3   | 13.23 |
| モデル3 | 6   | 21.09 |

に見た場合のオッズ比とも一致した。一方、各学部と「肯定」の1次交互作用は、  $\lambda_{AC(11)} = -.029 (-.21)$ ,  $\lambda_{AC(21)} = .25 (2.64)$ ,  $\lambda_{AC(31)} = -.22 (-1.2)$  であり、工学部を基準とすると法学部、歯学部は負の関係、理学部は正の関係がみられた。AO受験有無の要因を除去すると、理学部では全般的に工学部より肯定的、逆に歯学部では否定的な傾向であった。法学部は工学部に近いがやや否定的であった。

〔全学部〕

以上の分析から、AO受験有無の影響が無いと判断され、かつ、「モデル2」が最適モデルとされた変数は、「性別」のみであった。そこで、全学部とAO評価の関係について「性別」を要因に入れて考えることとした。なお、AO受験有無の要因をコントロールするために、AO入試経験者（合格者、不合格者）は対象から外す。

ここでの表記規則を示す。「i」は、学部を示すカテゴリの添え字であり、「学部：i=1：文学部，i=2：教育学部，i=3：医学部，i=4：薬学部，i=5：農学部，i=6：法学部，i=7：経済学部，i=8：理学部，i=9：歯学部」，「j」は、性別のカテゴリを示す添え字であり「j=1：男子，j=2：女子」，「k」は、AO評価のカテゴリを示す添え字であり「k=1：肯定，k=2：否定」を示す。なお、基準指標は先の分析と同じとする。

分析の結果、飽和モデルである「モデル1」が最適モデルとして選択され、「学部と性別とAO評価」の2次交互作用が確認された（表17）。特に、  $\lambda_{ABC(211)} = -.90 (-2.42)$ ,  $\lambda_{ABC(311)} = -1.17 (-2.41)$  と教育学部と医学部における負の2次交互作用が特徴的である。これらの学部と性別の1次交互作用は、  $\lambda_{BC(21)} = -2.34 (-7.18)$ ,

表17. カイ2乗値と最適モデル（学部）

| モデル  | 自由度 | 学部    |
|------|-----|-------|
| モデル1 | 0   | —     |
| モデル2 | 9   | 14.19 |
| モデル3 | 18  | 21.27 |

$\lambda_{BC(31)} = .07 (0.15)$  であり、男子比率の多い工学部と比較して教育学部の男子比率は極端に少なく、反対に医学部は工学部と同程度である。これらの学部とAO評価の1次交互作用をみると、 $\lambda_{AC(21)} = .81 (2.67)$ 、 $\lambda_{AC(31)} = .85 (1.82)$  と正の関係を示し、肯定的に捉えられていることが分かった。医学部では当初の分析結果とは異なる結論が得られたと言える。

全体的には医学部は肯定の程度が弱く、教育学部は強い。しかし、「学部と性別とAO評価」という3つの要因の関係で考えたときには、両学部とも「女子」がAO入試をより肯定的に捉える傾向がある。性別をコントロールし、学部の要因を純粹に取り出した場合、両学部とも工学部と比べて、AO入試には肯定的な評価である。医学部が否定的に見えたのは男子比率が高かったためである。なお、工学部でAO入試の肯定度合いが相対的に低いのは、AO入試実施学部でありながら、あえてAO入試を受験しなかった層を捉えた分析であるため、とみることができる。

#### 4. 考察

本研究では、2000年度以降、継続して調査されている学部新入生アンケートから、東北大学のAO入試が受験の当事者から肯定的に見られていることを確認した。

さらに、「年度」、「学部」、「性別」、「出身地域」、「AP有無」、「OC有無」、「AO受験有無」、「AO合否者」といった要因と「AO評価」に連関が見られるか否かを検討した。その結果、「出身地域」以外の要因に連関がみられた。「出身地域」についてみると、他の地域に比べても親近感や情報の得やすさが考えられる東北出身者が約半数を占めているにも関わらず、地域差が見られなかったことは興味深い。その他の要因については、大きく2つに分けることができる。「年度」、「学部」、「性別」、「AP有無」、「OC有無」の対象が限定されない全学部に共通するグループと「AO受験有無」、

「AO合否者」の対象がAO入試実施学部のみに限定された当事者性が強いグループである。AO評価との連関は後者が強かった。特に、AO入試の「合格者」、「不合格者」の立場の違いによるAO評価へ与える影響の強さは顕著であり、合格者は肯定的に、不合格者は否定的に捉える傾向があった。こうした傾向は、「利己心モデル」<sup>17)</sup>の観点からの解釈が可能である。利己心モデルでは、人々は利己的な存在で、常に自己利益を最大化しようとする動機を持っていると仮定する。つまり、合格者は、自分の能力を判定したAO入試という選抜を適切なものとして捉え、他の一般選抜と比較しても自分は合格者に相応しいということを正当化していると考えることができる。反対に、不合格者は、AO入試に対して否定的に捉える傾向があり、中には制度的な批判になる者もいる。したがって、AO入試受験経験者のAO評価は自分の利益に左右された判断になることは否めない。

同様に、AO評価に与える影響として「AO受験有無」も留意されるべき要因である。全学部共通のグループに属する各要因とAO受験有無とAO評価の関係について対数線形モデルによる分析をした結果、「年度」、「学部」、「AP有無」において2次交互作用が確認された。つまり、カイ2乗検定による各要因とAO評価との連関は、見かけ上のもので、AO受験有無との関係を考慮に入れる必要性が示唆された。具体的には、「年度」によるAO評価の違いは、年度固有の要因というよりも受験者数の多い工学部による影響と言える。つまり、学部と受験有無の関係の強さが年度の違いに影響を与えたものと考えることができる。

AO受験有無の要因がAO評価に与える影響には学部差が見られた。特に、法学部と歯学部は工学部や理学部と比べ、AO受験の経験がAO評価を肯定的に捉える傾向を強めることが示された。当該2学部では、AO入試の受験経験者の中でAO入試を否定的に捉える者が非常に少なかったことが原因である。実は、当該学部のAO入試受験者の内訳をみると、AO入試不合格経験者が極端に少なく、その不合格者のみがAO入試を否定的に捉えていたことが分かった。結局、AO入試受験者が合格者と不合格者から構成されていることから、これも利己心モデルによって説明が可能

となる。

「AP有無」については、APの知識を持っていることとAO評価との関係はそれほど強いものではなく、むしろAPの知識はAO受験との関係が強い。AO入試受験を決意して後にAPの知識を得たか、APを知ったことがAO入試の受験を促したか、2通りの可能性が考えられるが、本研究の結果から因果の方向性を判別することはできない。AP知識の普及がAO受験につながる主要な要因となるのかどうかは、今後の研究課題である。

「性別」と「OC有無」には「AO受験有無」との2次交互作用は見られなかった。OC有無は、1次交互作用も確認されず、OCへの参加経験が直接的にAO入試に対する肯定的な評価をもたらすわけではないことが示された。ただし、カイ2乗検定の結果やOCへの参加が東北大学への進路決定の指針になるという事実<sup>18)</sup>を踏まえると、「OC有無」がAO入試の受験を促し、それが結果的にAO評価に影響を与えている可能性が考えられる。

一方、「AO受験有無」の要因と無関係にAO評価に影響を与えたものは「性別」であり、女子が男子よりもAO入試を肯定的に捉える傾向が強いことが示された。AO入試を受験しなかったとしても、女子が総じて肯定的な意見を持つ傾向があるということは、一般にAO入試の区分で女子比率が高いという事実とも符合する。今後、推薦からの切り替えではなく新たにAO入試を導入する学部では、受験者や入学者の女子比率が高まっていくことが予想される。

「AO受験有無」の要因を除いた「全学部と性別とAO評価」には2次交互作用が確認された。特に、教育学部と医学部が特徴的であった。男女比では、文学部と教育学部は同程度であるものの、文学部の女子がオッズ1.18(オッズ比:.78)であるのに対し、教育学部の女子はオッズが5.67(オッズ比:.39)と女子にAO入試を肯定する傾向が極めて強い。また、医学部も同様に男子比率の高い工学部と比較した場合、工学部では4.35(オッズ比:.66)であるのに対して、医学部の女子のオッズは6.17(オッズ比:.28)であり、同様の傾向が見られた。

教育学部と医学部に特有に見られたこうした傾向を

説明するものとしては、両学部の特徴が考えられる。すなわち、両学部とも人間の育成や病気の治療といった、人の心と身体に直接関わるテーマが学部の目的に含まれている。とりわけ女子にとって、AO入試がそのような目的の実現に結びつく入試方法であると受け取られた可能性は否定できない。

2007年度からは、医学部医学科もAO入試を実施する予定である。実際、AO入試の受験者が現れてきたときに、これらの傾向がどのように変化するかは興味深い。

## 5. 結語

近い将来、東北大学のAO入試はさらに拡大する。AO入試の受験者、さらにAO入試を通じて入学してくる学生が増えることになる。こうした「当事者性」がAO入試の評価に影響を与える大きな要因となっていることは既に述べたところである。幸い、現時点において、東北大学のAO入試はAO入試以外の区分の入学者からも肯定的に捉えられている。しかしながら、否定的な意見を詳細に見てみると、面接や評価方法の基準と関連した公平性への疑念が数多く見出される。今後は、公平性の観点をより強く意識した選抜方法の工夫が課題となるだろう<sup>19)</sup>。

大学のイメージを形成する要因として、入試制度は重要で欠かせないものである。東北大学を志望する受験生に入試制度を肯定的に捉えてもらえるならば、直接、大学のイメージアップにつながる。今後、当事者に支持される制度を持続し、整備していくためには、それを成立させる基盤の吟味が欠かせない。所与の条件が変われば、帰納的に導かれる制度策定の方針も異なってくるのである。大学自身とそれを教育の面で支える学生の供給母体ともに益になる制度策定には、実証的な入試研究が不可欠である。

最後に、本稿で示したような、教育制度や教育方法の評価と策定に直接的な示唆を与える実証的研究は、今後、必ず必要になってくる。本研究のような志向性が、これからの教育学的研究の目指すべき方向性であると受け止めてもらえるならば幸いである。

## 〔付記〕

本研究は、平成18年度東北大学総長裁量研究推進経費「東北大学アドミッションポリシー策定に関わる基礎調査（研究代表者：荒井克弘）」の成果の一部である。

## 〔参考文献・註〕

- 1) 荻谷剛彦. なぜ教育論争は不毛なのか——学力論争を超えて, 中公新書ラクレ. 2003, p.5.
- 2) 木村拓也. 「総合的かつ多面的な評価」に基づく大学入学者選抜の淵源——選抜効果とその修正公式を巡る教育測定技術の技術社会史的考察, 日本教育社会学会第58回大会発表要旨集録, 61-62. 2006..
- 3) 荻谷, 前掲書, p.7.
- 4) 西村和雄. 「ゆとり教育」を経済学で評価する, 教育改革の経済学, 日本経済新聞社. 2003, p.19.
- 5) 例えば, 倉元直樹・奥野攻. 平成12年度東北大学歯学部AO入試について, 大学入試研究ジャーナル, 2001; 11, 43-48, 倉元直樹・川又政征. 高校調査書の研究——『学習成績概評A』の意味, 大学入試研究ジャーナル, 2002; 12, 91-96, 鈴木敏明・夏目達也・倉元直樹. オープンキャンパスとAO入試, 大学入試研究ジャーナル, 2003; 13, 7-10, 倉元直樹・末永智一. 志願者の質の評価——東北大学AO入試Ⅱ期（工学部）の例, 大学入試研究ジャーナル, 2003; 13, 11-16, 倉元直樹・奥野攻. 「追跡調査」の技術的検討——東北大学歯学部の事例, 大学入試研究ジャーナル, 2006; 16, 21-29, 倉元直樹. 新教育課程における東北大学の入試と教育接続——主に理科・情報, および, 入試広報の観点から, 東北大学高等教育開発推進センター研究紀要, 2006; 1: 1-14, 木村拓也・倉元直樹. 戦後大学入学者選抜制度の変遷と東北大学のAO入試, 東北大学高等教育開発推進センター研究紀要, 2006; 1, 15-27, 倉元直樹・西郡大・佐藤洋之・森田康夫. 後期日程入試の廃止問題に対する高校教員の意見構造, 東北大学高等教育開発推進センター研究紀要, 2006; 1, 29-40, 倉元直樹・佐藤洋之. 高校生の大学イメージ, 大学入試研究ジャーナル, 2006; 16, 179-185, 佐藤洋之・倉元直樹. 入試広報としての学部名称を考える——高校生はどう捉えたか, 教育情報学研究, 2006; 4, 25-33. などが挙げられる.
- 6) 木村拓也・倉元直樹. 戦後大学入学者選抜における原理原則の変遷——『大学入学者選抜実施要項』第1項選抜方法の変遷を中心に, 大学入試研究ジャーナル, 16, 187-195. 2006.
- 7) 木村・倉元 前掲論文, 戦後大学入学者選抜制度の変遷と東北大学のAO入試, p.24.
- 8) 倉元直樹. 東北大学における「アドミッション・センター」の取組と課題, 大学入試フォーラム, 29, 2006, p.17.
- 9) 調査アンケートの「AO入試のポリシー」は, 東北大学の「アドミッションポリシー」のことを示す.
- 10) B.S.エヴェリット. 質的データの解析 - カイ2乗検定とその展開 - . (弓野憲一・菱谷晋 訳). 1980.
- 11) 本稿の「医学部」は, 「医学部医学科」を示す.
- 12) B.S.エヴェリット. 前掲書. 1980. p.83.
- 13) 江上由美子・大竹政子・割田勝子・藤森紀子・平直樹. 女子青年期における心身医学的問題について——母親との対比を中心に——. 東京大学教育学部紀要, 29, 243-266. 1989.
- 14) アプトン. 調査分類データの解析法 (池田央・岡太彬 訳). 朝倉書店. 1980.
- 15) 太郎丸博. 人文・社会科学のためのカテゴリカル・データ解析入門. 2005.
- 16) B.S.エヴェリット. 前掲書. 1980.
- 17) Lind, A. & Tyler, T.R. (1988). The social psychology of procedural justice. New York: Plenum. フェアネスと手続きの社会心理学——裁判, 政治, 組織への反応—— (菅原郁夫・大淵憲一訳). ブレーン出版. 1995.
- 18) 倉元直樹. 新教育課程における東北大学の入試と教育接続——主に理科・情報, および, 入試広報の観点から, 東北大学高等教育開発推進センター研究紀要, 1, 1-14. 2006.
- 19) 東北大学のAO入試と関連して個人の公正感に注目した研究に, 「林洋一郎・倉元直樹. 公正研究から見た大学入試, 教育情報学研究, 1, 1-14. 2003」, 「西郡大・倉元直樹. 日本の大学入試をめぐる公正研究——社会心理学的視点からのアプローチ, 日本テスト学会, 3. 投稿中」の2つが挙げられる.

このアンケートは東北大学の「AO入試」と「オープンキャンパス」に関するものです。今後の改善のための資料となりますので、是非、回答にご協力ください(無記名で結構です)。

性別 ( 1:男, 2:女 )

出身都道府県名 (平成 15 年 7 月末時点での居住地) \_\_\_\_\_

学部 (学科) ( 1: 文, 2: 教育, 3: 法, 4: 経済, 5:理, 6:医 [医学科],  
7:歯, 8:薬, 9:工, 10:農, 11: 医 [保健学科] )

---

1. AO入試について

Q 1. あなたは、東北大学のAO入試を受験しましたか？ 1つだけ○をつけてください。

( 1: AO入試で合格した, 2: 受験したが不合格だった, 3: 受験しなかった )

↓

Q 2 へ

↓

Q 2 へ

↓

Q 3 へ

Q2. 東北大学AO入試を受験した理由は何ですか。具体的に記述してください。

→ Q 4 へ

Q 3. 東北大学AO入試を受験しなかった理由は何ですか？具体的に記述してください。

(例) 志望学部がAO入試を実施していなかった。

→ Q 4 へ

Q 4. 東北大学のAO入試は、**十分な基礎学力を基盤とした上で、意欲、志望動機等を重視する**ものですが、あなたはそのポリシーを知っていましたか？また、それについてどう思いますか？

東北大学のAO入試のポリシーを ( 1: 知っていた, 2: 知らなかった)

東北大学のAO入試に対する意見：

Q 5. **他大学**で実施されているAO入試の中には、学力を度外視して人柄や一芸を評価し、選抜を行っているところも多数あります。それらも含め、あなたはAO入試一般についてどのような印象をお持ちですか？

## 2. オープンキャンパスについて

Q 6. あなたは平成 15 年度の東北大学のオープンキャンパス（平成 15 年 7 月 30 日, 31 日開催）に参加しましたか？

（ 1: 参加した, 2: 昨年は行かなかったが以前に参加経験がある, 3: 参加しなかった ）

↓

Q 7 へ

↓

Q 7 へ

↓

Q 9 へ

Q 7. どの学部（学科）の催しに参加しましたか。参加した学部（学科）全てに○をつけてください。

1: 文, 2: 教育, 3: 法, 4: 経済, 5: 理, 6: 医（医学科）,

7: 歯, 8: 薬, 9: 工, 10: 農, 11: 医（保健学科）

Q 8. オープンキャンパスへの参加は, あなたが入学した学部（学科）への志望の決定にどの程度の意味がありましたか？ 1 つだけ○をつけてください。

（ 1: 決め手となった, 2: 参考になった, 3: あまり関係がなかった, 4: 全く無関係 ）

→ Q10 へ

Q 9. あなたが本学のオープンキャンパスに参加しなかった理由は何ですか？具体的に記述してください。

→ Q10 へ

Q10. あなたは他大学のオープンキャンパスに参加しましたか？参加した場合には, 特に良い印象を持った大学名を挙げてください。

（ 1: 参加した [印象に残った大学 \_\_\_\_\_], 2: 参加しなかった ）

Q11. 受験生の立場として, あなたが仮に今年度の本学オープンキャンパスに参加するとしたら, どのようなことを望みますか？できるだけ具体的に記述してください。

Q12. オープンキャンパスを訪れる受験生の中には在学生の声を聞きたいという希望もあるようですが, もし, 今後, あなたが東北大学のオープンキャンパスでボランティアとしての活動を頼まれたら, 引き受けますか？ 1 つだけ○をつけてください。

（ 1: 是非やりたい, 2: できればやりたい, 3: 条件による, 4: 引き受けたくない ）

アンケートは以上で終了です。ご協力ありがとうございました。

新入生オリエンテーションの際に提出する《入学者提出書類用封筒》に入れて下さい。